

～子どもはより子どもらしく～

学校法人健伸学院

健伸行田幼稚園のご案内



- 今年で創立50年目を迎える、笑顔と元気がいっぱいの幼稚園です。
- 遊びを大切に、教育理念に「子どもはより子どもらしく」を掲げて、子ども中心の教育をおこなっています。
- 子どもの表現活動を大切にして、体操・音楽・絵画の取り組みにも力を入れています。
- 教育時間は、「月・水・木＝10時～14時」「火・金＝10時～15時」です。
 - ※ 登園時間は8時40分～10時(バス通園は、運行コースによって異なります)
- 預かり保育は「保育前：8時～」「保育後：～18時」まで行っています。
 - ※ 夏休みや冬休み・春休み等の長期休業中も、預かり保育を行っています。
 - ※ 幼稚園の教育料と同じく、預かり保育も「幼児教育の無償化」の対象となります。
(詳しくは、幼稚園までお問合せ頂くか、船橋市のホームページをご覧ください)
- 地震等の災害に備え、全園児3日間分の非常食(飲み物・食べ物)を用意しているほか、毎月避難訓練を行っています。また園バスに安全装置を設置し、人数の確認・点呼など、複数人による安全確認を行っています

いつもの子ども達の様子が
ご覧いただけます



幼稚園の紹介～一日の過ごし方～

健伸行田幼稚園では、大勢の友だちや教師と共に過ごす生活の中で、たくさんの体験を積み重ねます。幼稚園では、「遊び」や「生活」から湧き出す「なんだろう?」「やってみたい!」という子ども達の興味・関心を大切にしています。友だちと一緒に遊んだり、音楽・体操・絵画等を楽しんだり、たくさんの経験を積んで、子ども達は自分で考えて学び合い、育ちます。子ども達(年少組)の1日を、ちょっとのぞいてみましょう。

登園 8時40分～



朝の集まり 10時00分～



登園したら、まずは教師と「おはよう」のあいさつ。「今日は何日かな?」と、自分で登園シールを貼って1日が始まります。

通園リュックを棚にしまって、自分で身の回りの整理をしたら、さっそく思いっきり遊び始めます。

通園バスも到着して、友達がみんな揃ったら、みんなで「おはようございます」のあいさつです。「今日は何して遊ぼうか?」「面白いことがいっぱいあるよ」。教師の話聞いて、ワクワク感が広がります。子ども達の目はキラキラと輝いていますね。



自由遊び/活動 10時15分～



朝のあいさつが終わったら、さまざまな活動が始まります。

子ども達の「遊び」を大切にする健伸行田幼稚園では、子ども達が思いっきり遊び、没頭できるよう、十分な遊びの時間と環境を整えています。

「子ども達の心と体の、伸び伸びとした健やかな育ち」を願い、専任の体育講師による体育指導に加え、子どもの表現にも力を入れ、音楽・絵画活動の充実も図っています。



昼食 12時00分～



最初は食事の準備ができない子も、少しずつ自分のことは自分でできるようになってきます。

「見てみて！おいしそうですよ」「ぼく、おにぎり大好き」。子ども達は満面の笑顔です。友だちと一緒にのお昼ごはん。友だちとの会話はとても楽しそうですね。

お腹いっぱい食べた子ども達は元気いっぱい！片付けをしたら、それぞれ遊びにいきます。



帰りの集まり、降園の準備

13時30分(月・水・木)

14時30分(火・金)



一日、思いっきり遊んだら、降園までの間、みんなで集まって、ゆっくりとした時間を過ごします。

絵本の読み聞かせに耳を傾ける子ども達は、笑顔で嬉しそうに、時に真剣な表情を浮かべながら、物語の世界を楽しんでいますね。

帰りの準備も1人でできるようになってきました。

降園

14時00分(月・水・木)

15時00分(火・金)



「今日は、こんなことをして遊んだんだよ」と笑顔いっぱい話したり、「はい、お母さんへのおみやげだよ」と自分で作った製作物をプレゼントしたり…笑顔でご家族と話す子ども達はとても楽しそうです。

【園長からのご挨拶】

幼稚園では毎月の園便りを通して、“幼稚園での子ども達の様子”や“月々の園の活動”、“園の保育の考え方”等をお伝えしています。子ども達はたくさんの経験を積んだり、友達と元気いっぱい遊んだりしながら、大きく育ちます。そんな子ども達の育ちをご家庭と共有できればいいなと願っています。

また園便りでは、園の教育方針をテーマに“園長便り”も書いています。せつかくの機会ですので、皆さまに園の教育をお伝えできるよう、今年度はじめの園便りから、2つご紹介したいと思います。

皆さまに、健伸行田幼稚園の教育を少しでもお伝えできれば幸いです。

<“主体的・対話的な深い学び”とは>～園便り 4月号より～

今日から新年度が始まります。つばめ組はひばり組へ、カナリヤ組はつばめ組へと進級しますね。新しいひばり組の子ども達は、“幼稚園で一番上のお兄さん・お姉さんになった！”と、新しいつばめ組の子ども達は、“幼稚園に新しい弟・妹がやってくる！”という期待と喜びで、胸膨らませているでしょう。

新しいひばり組の子ども達にとっては、幼稚園での総決算の1年になります。子ども達にとって楽しく、充実した1年になるよう、教職員一同、努めて行きたいと思います。

さて、今回は新年度最初の園便りになりますので、今の教育の考え方についてお話ししたいと思います。

教育の在り方は、今と昔とでは大きく違います。皆さんが子どもの頃と比べてどうでしょうか？思い出しながら読んで頂けると、面白いかも知れません。

今の教育の考え方を表しているものに、「主体的・対話的で深い学び」という言葉があります。昔の教育の多くは、「教師が何を教えるのか」という視点から行われていました。しかし、これでは「何を、どれだけ知っているのか」という知識偏重の教育になりがちです。学校でのテストでも、“どれ位の知識を覚えているかが勝負”のような問題ばかりでした。でもこれでは、“その場限りで、将来何の役にも立たない知識ばかり”という結果になりかねません。それでは、何のために勉強するか、わからなくなりますよね。

この反省から、これからの時代を生きる子どもに必要な“資質や能力は何か”(いわゆる「生きる力」)を考え、それを”どのように学ぶのか”が重視されるようになりました。その学びの姿が「主体的・対話的で深い学び」です。この学びの主語は「子ども」です。つまり、子どもが「主体的」に、(一方的な指導ではなく)“周りに関わり合い、学び合う事(対話的)”が大切です。子どもが自分で考えて行動して得る「学び」。言うのは簡単ですが、実際にはなかなか難しい事です。具体的な例を挙げながら、イメージして考えてみましょう。これは、先日参加した研修会で取り上げられた事例です。

ある幼稚園の年長組の芋掘り行事です。その幼稚園では自分で掘った芋を、自分が持参したリュックに入れて、幼稚園まで歩いて持って帰ります。その時には、子どもが“どれ位の大きさのリュックを持ってきて”、そのリュックに“どれ位の量の芋を入れるか”を考えます。そこでは「自分で選択・決定した事に対して、責任を持って取り組む」、だから「幼稚園までの帰りの途中、リュックが重くて大変でも、最後まで自分で持って帰る」のがルールです。「自分で自分の力を知る」、その上で「自分で選択や判断をする」のは、大切な学びです。

ところが、ある子が自分の身体よりも大きいリュックを持って来て、そのリュック一杯にたくさんの芋を詰

め込んだそうです。その結果は…ご想像の通り、途中で「無理！もう帰りたい！」と泣き出す始末。この事例を読んで、皆さんはどう思われたでしょうか？また、自分だったら、その子にどう関わりますか？助けますか？それとも最後まで自分で頑張って持たせますか？

「子どもの主体性を大切にする」というと、「子どもが決めた事だから、言った事だから」と、子どもの判断に任せてしまいがちです。でも、それで良いのでしょうか？大人の役割は見ていただけなのでしょうか？先程の事例では、“自分の身体に合わない大きいリュックを持ってきた”のは自分です。そして、“そのリュック一杯に芋を詰め込んだ”のも自分です。先に「最後まで責任を持って、帰る時には芋は自分で持つ」と聞いていたのだから、子どもが泣いていても最後までやらせる。それは正しいのでしょうか？

最初から「そんなに大きなリュックはダメ」とか「芋はこれ位の量を入れなさい」と、大人が判断して指示したのでは、子どもの主体性は育たないでしょう。でも、明らかにリュックが大きいなら「こんなに大きくて大丈夫？」と声を掛けたり、「そんなにたくさん芋を入れたら持てないよ。どうする？」と子どもと一緒に考えたりするのは、ダメな事でしょうか。子どもが自分で理解し、正しく選択できるように、子どもと対話をする。それは子どもの育ちを支える大人の役割だと思います。もちろん、一度話ただけで、子どもが理解したり納得したりするのは難しい時もあるでしょう。特に幼児期の子どもは、生まれて数年の経験しか持っていませんから、“どれ位の重さなら自分で持てて”“どれ位歩けるか”なんて、想像するのが難しいのは当然です。だからこそ“子どもと対話する”ことが必要で、そのやり取りを重ねる中で、子どもは自分で考える力が身に付けて行きます。

「家から持ってきたリュックを選んだのは、大人なのでは？」と思った方もいらっしゃるかも知れません。そうすると、その大きなリュックを持たせた“大人の思い(例えば、たくさん芋を持って帰って来て欲しい、いっぱい芋を取らせてあげたい)”は一方的なもので、“子どもの思い”とかけ離れているのかも知れません。子どもがリュックを背負って歩く姿を想像しながら、子どもに合った大きさを提案し、一緒に話し合う事が大切です。

大人の役割は、“子どもが育つ環境を作る事”と言います。子どもが自分で考えて、行動する。こうした主体性は「子ども任せ」で身に付くものではありません。幼稚園でも、子ども一人ひとりの育ちの姿に合わせて、対話を重ねる事を大切にしています。ご家庭のご理解・ご協力を頂きながら、これからも“主体的・対話的で深い学び”が叶うよう取り組んで行きたいと思っております。今年度も引き続き、どうぞ宜しくお願いします。

<いっぱい泣いていっぱい元気になる~心の中を表現する> ~園便り 5月号より~

早いもので入園式から1カ月弱が過ぎ、カナリヤ組の子ども達も少しずつ幼稚園生活に慣れてきた様子が伺えます。いつも朝泣いていた子も、友達や教師と一緒に過ごすうちに、好きな遊びや場所が見つかって、ニコニコ顔が増えてきました。これは毎年、幼稚園で見られるいつもの光景です。でもあらためて考えてみると、幼稚園での生活は新しい出会いの連続で、子ども達にとっては毎日がチャレンジの場なのかも知れません。

幼稚園で子ども達の姿を見ていると、「実際に子どもはどのように感じているか」を知りたくなります。でも残念ながら、大人が子どもになるのは無理です。それならば、大人の場面に置き換えて考えてみたいと思います。

子ども達にとっての「初めての幼稚園」は、大人にとっての「初めて出会う人達の集まり」に例えられます。(進学や就職した新しい学校や会社かも知れませんが、知らない人達との飲み会や親睦会かも知れません)。

ここで想像してみてください。もし、その輪の中に自分ひとりで乗り込んで行くとしたら？きっと緊張して一言も話せない人もいられるでしょうし、泣きたい気持ちで「早く終わらないかな、早く帰りたいな」と思う人もいられるでしょう。これまで同じような場面を何度も経験してきた大人でさえ、居心地の悪さに逃げたくなるものです。ましてや、初めて家族以外と過ごす子ども達なら、不安いっぱい「早く家に帰りたい」と泣くのは当たり前です。

世間一般では、「幼稚園児=赤ちゃん(乳児)」くらいに幼い存在だと思われがちです。でも子どもは大人が思っている以上に、“自分で育つ力”を持っています。最初は「早く帰りたいな」「お母さん、お父さんに会いたいな」と不安いっぱいでも、誰の力を借りるでもなく、自分で“自分の居場所”を作ります。「居場所=安心できる場所」ですから、そこに“安心感”を見出し、徐々に“ドキドキ感”から“ワクワク感”へと変えて行きます。(“苦痛に感じていた場”も、慣れる事で気持ちが楽になって、“楽しい場”に変えられるのは、大人も同じですね)。

「今頃、幼稚園で何やっているのかな？一人で頑張っているのかな？」と、ご心配な方も多いと思います。でも、あまり心配し過ぎると逆に、ご家庭の不安な気持ちが子ども達にも伝わるものです。心配し過ぎるよりも、むしろ「その内、慣れてくれるだろう」と余裕を持つ事が大切です。「幼稚園、楽しんできてね」と笑顔で送り出し、子ども達が帰ってきたらいっぱい聞いてあげて頂きたいと思います。

そもそも「泣く」という行為は、どういう意味を持っているのでしょうか？子どもにとっての「泣く」について、少し深掘してお話したいと思います。

お子さんが、赤ちゃんだった頃を思い出して下さい。「お腹が減ったのかな」「体調が悪いのかな」「オムツが濡れているのかな」「機嫌が悪いのかな」…あやしても、抱っこしても泣くばかり。何とかしてあげたくても、

まだ話す事ができない赤ちゃんの気持ちは分かりません。どうして良いか分からず、その内にこっちが泣きたくなった。そんな経験は、皆さんお持ちだと思います。それはイヤイヤ期の2歳、そして幼稚園に入園してからも続きます。ほんのちょっとした事で泣き始め、いつまで経っても泣き止まない…そうなると「いつまで泣いているの！もう泣かないの！」と言いたくもなりますよね。でも「泣く」という行為は、単なるワガママではなく、子どもの“心の表現”と考えればどうでしょう？「きっと何かを伝えたいだけ」と思えば、少し気が楽になるかも知れませんね。

自分の気持ちを言葉で表したり、他人に伝える事が難しかったりする子ども達にとって、“泣く”という行為はコミュニケーションの手段でもあります。そう考えると「子どもが泣く時＝子どもが何かを伝えたい時」ですから、子どもと心を交わし合う絶好の機会かも知れません。泣いている時は、子どもの内で感情が激しく揺れ動いている時ですので、落ち着いて話すのは難しい状況です。ですから、手をつないだり様子を伺ったりしながら、しばらく待ってみる。しばらくして、自分の力で心を落ち着かせることができた時がチャンスです。「どうしたの？何があったの？」とゆっくり話し掛けてみると、心を開いてくれるかも知れません。

大切なのは「あまり焦らないこと」、そして「この対話を繰り返し、積み重ねること」です。「全然、話を聞いてくれなかった」「聞いても話してくれなかった」と、その時に上手く行かなくても、この会話をした事に意味があります。きっと「耳を傾けてくれた」という思いが子どもに届いているはずですから、“つながりの第一歩”になるのだと思います。

不安だったり悲しかったりする時、“泣きたくなる”のは子どもだけではなく、誰もが持っている感情でしょう。その“泣きたい気持ち”を我慢する事から、子どもは何を学べるのでしょうか？“我慢＝自分の心を抑える”という側面を持っていますから、我慢をすればする程、心の中にモヤモヤした気持ちが積み重なるかも知れません。でも思いっきり泣いて、自分の不安や悲しい気持ちを外に吐き出してしまえば、どうでしょう？心の中はスッキリするかも知れません。心にある重い“モヤモヤ感”が吹き飛んでスッキリできたら、やがてそれは“心の安定”へとつながって行くでしょう。この“開放”と“安定”を繰り返し、子どもの心は大きく豊かに育てて行きます。

不安や悲しい気持ちは、その場その場の状況に応じて起きるものです。「週末で一週間の疲れが溜まってきた」「休み明けに幼稚園に行くのが不安だ」…泣いている子どもによくある理由です。また同じ経験をしていても、感じ方は人それぞれです。入園した頃、朝泣かなかったのに、GWや夏休み明けになって何故か泣き始める。毎年そういうお子さんもいらっしゃいます。でも、それは赤ちゃん返りではなく、周りの状況が見えたり理解出来たりするようになったりした結果かも知れませんし、自分の気持ちを表現できるようになった結果かも知れません。ですから、子どもの“成長の証”とも言えます。

泣きたくなるような不安な気持ちになった時、それに向き合い、葛藤しながらも自分の力で乗り越えようとする。それもまた1つ大きく育つための大切な経験です。もちろん言葉で言う程、簡単ではありません。だからこそ、子どもの心を支え、温かく見守る事が大切です。それは私達、大人の役割なのだと思います。

一年間の子ども達の生活

4月	入園式
5月	園外保育（年長児）
6月	父親参観
7月	園外宿泊（年長児）
8月	園内宿泊（年中児）
9月	運動会
10月	園外保育（年中児）
11月	表現を楽しむ会
12月	クリスマス会
1月	
2月	作品展 節分
3月	園外保育（年少児） 卒園式

